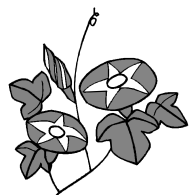


他校のPTAは何してる？

自己紹介から・・・

- 後援会的なPTAの中で、何人かで奮闘しているところです。今教育予算が減らされていて、聞くところによると先生の通勤手当も赤字状態だそうです。わら半紙のお金もままならない学校もあって、PTA会費からの流用というのがあたりまえのようになっています。地域によっては、運動会の前に寄付を募るところもあって、以前はそれを飲み食いに使っていたようですが、今は何に使われているのかわかりません。PTA会費から教育予算への流用をシャットアウトしたいところですが、それ以前に今あいまいになっている流用されているお金の使い道を、まず明らかにするような関係・仕組みを作っていきたい。
- 学校がしなくていい仕事は、学校の外に引っ張り出したい。先生が子どもと向き合えるように。そして、子どもがお客さんではなくて、主役になる学校づくりを。地域連携委員会のお金の使い方が気になっている。ユニフォーム代など、ちょっと学校のおねだりが始まってきているかな。
- 大学院の学生です。学校選択制が一般的には親が主体的に学校を選ぶことによって、学校に積極的に関わるようになるといわれているが、実際はどうなのか非常に気になっています。
- 松戸の教育改革で廃校になった根木内東小学校は、PTAが立ち上がって作った学校。根木内小学校が生徒数が2000人を超えるマンモス校になり、PTAが2年がかりで運動して、新しく根木内東小学校を作りました。でもその学校が廃校に。地域の人口は増えているので、統合された根木内小学校はまだ大規模校になっています。千葉県では今年から小学校1・2年と中学校1・2年は36人学級。それ以外の学年は38人学級がやれるようになりました。少人数学級がどんどん拡大していく方向にあります。でもせっかく少人数学級ができるようになって、根木内小では教室が足りなくて実現できない。そういう矛盾を抱えている。でも地域住民や保護者は、厳しい世の中で生きていくためには競争をかくぐったほうがいいと、小さい学校を敬遠する傾向がある。
- 松戸市は子どもたちのいじめ・不登校が多い。特に中学生。なかなか解決の糸口が見えない。そんな中、松戸市では今年の4月、Q-U調査という心理テストを小学校5年生と中学校1年生を対象に実施した。「あなたはクラスの人から好かれていると思うか」とか「友だちになりたいと思っている人はいますか」というような質問があり、固有名詞を書くような質問もある。子どもたちの内面に关わる質問をするようなリスクをおかしてまであえてやるのはなぜか。教師評価や学校評価につながる可能性もある。5月と11月にやって、進歩があるかどうか検証するといっている。進歩がない学校はだめという烙印を押される可能性がある。様々な問題を含んでいる。
- PTAの現役だった頃からもう10年近く時間がたってしまいましたが、



当時はPTAのお金の使い方を総会や運営委員会などで問題にしてきました。それを繰り返してきたことで、お金の使い道がオープンになったし、おかしなお金の使い方は改善されてきた。総会などオープンな場所できちんとした説明を求めていくことはとても大事なことだと思う。変わらないこともたくさんありますが、会員がその問題を考えるきっかけになります。

- 先ほど話に出た「Q-U調査」についても、その説明をPTAが求めていくことも必要。求めなくても保護者に対しての説明はすべきだと思います。
- 今までもPTAの会計から学校の花壇を整備するとか、備品はダメだから消耗品にお金を出すとか、部活の援助費を出すとか、いろいろな使われ方をしていますが、教育予算がますます削減される中、その傾向がまた強くなっている気がします。そういうことがおかしいということのをそれぞれが意識できるようなことをしていかなく

てはいけないと思います。



うちのPTAでは役員会が大きな権限を持っていて…

- うちのPTAは今年4月に会則変更をして、組織の再編をしました。地区委員会が十分に機能していないと考えて、地区委員会を地区部会と改名して役員会直属の部会になりました。本来PTAというのは保護者一人ひとりに発言権があるはず。でもうちのPTAでは役員会が大きな権限を持っていて、役員は「何かある時はすべて私たちを通してくれ」と言います。
「バラバラに出される意見はどうしても個人的な価値観になってしまいます。ですから何かあった時には全体にとってどうなのかを考える場所である役員会を必ず通してください。最終的に子どもたちにとってどうかを学校と役員会がともに考えていきます」とか、「学校教育にとってよいかどうかの最終的な権限は学校にあります」という文章もお知らせの中にありました。これを読んで、学校後援会のPTAになってしまったなと感じました。
- この組織図を見ていると、おかしいのは役員会の位置づけ。ボランティアがいいかどうかは別として、ボランティアをきちんと横につなげてPTAの中に部会としてまとめ、連絡調整したり、窓口を一本化したりというのは、おかしいことではないと思う。
- うちのPTAも同じように役員会が全部決めてしまう。それからPTAの広報がないというのも同じ。
- 非常に風通しが悪く、独断的。そして完全に学校のバックアップに回っている。例えば読み聞かせボランティアで、保護者が本を選ぶのにも役員会の許可が必要になるのではないかと危機感を感じています。そして役員会が最終的な権限は学校にあるといっているの、学校にだめといわれたら、それでおしまいになってしまうのではないかと危惧します。
- うちの学校でも読み聞かせボランティアは上意下達になっている。上意になっているのは、旧本部役員のOGたち。本を決めるのは全部彼女たち。彼女たちが選んだ本の中に「天岩戸」があった。PTA会費の中から神話シリーズの本を買っていた。「なぜ天岩戸なのか」と尋ねたら、「子どもにとって日本の伝統文化に触れることは非常にいいから」と答えた。「日本の伝統文化ならもっと他にもいろいろあるし、百歩譲っても因幡の白兔

の方がいいのではないか」と言ったんですが、全然通じませんでした。

- これだけ役員の権限を強くしてしまうと、仕事の量も多いですし、役員のなり手がなくなってしまうのではないかと思います。ましてや働いているお母さんたちが増えてきていますから。
- 隣接する学校のPTAでは、働いているお母さんたちを中心に動いています。働いているお母さんたちが自分たちのやり方でやろうと、ゆるい運営になっていると聞いています。誰でもできるPTAにしないといけないと思う。
- 先ほど役員会の位置づけがおかしいといいましたが、役員会というのは内々の会なんです。代表委員会や運営委員会というのがPTAの運営についての意見を集約する場。総会・全体会というのが最高議決機関に当たります。総会で決められたことを具体的にどう活動していくか、どう運営していくかということ話し合うのが運営委員会や代表委員会。役員会というのはあくまでも事務局。運営委員会や代表委員会の議題をどうするか等の事務的な作業や打ち合わせをする場に過ぎない。組織図で言えば、代表委員会の横に役員会を並べればいい。この役員会の位置づけについてこれから議論していけばいい。とにかくこのままでは役員のなり手がいなくなって、PTAが全く機能不全に陥ってしまう。



どういった役員の選び方をしていっているというのは、PTAのあり方を大きく左右するもの

- うちのPTAでも役員のなり手がなくて、去年の選考の時に非常にもめました。選考委員のなり手もなく、役員が選考委員会に入ってしまった。しかし選考委員になった役員が多くの人から推薦されたので、本部役員を引き受けると言い出しました。それでは不信感が募るので認められないので、私が会長に立候補しますと運営委員会で手上げました。そうしたら翌日、「役員が誰も決まらないのでまた推薦を募ります」という文書を配布されました。私が立候補したことは全くなかったことになってしまいました。こんな文書を出すことも運営委員会では話されていなかったし、こんな不正な手続きで行われる選考に乗ってしまうのもイヤなので、私は立候補を取り下げました。こんな情勢で立候補しても自分自身に不利だとも思いましたし、もう少し足場を固めてからと考えました。仲間がいない中で声を上げることはとても勇気がいることですが、意外に同じ思いでいる人がいて、声を上げるのを待っている人がいるんだと実感します。
- どういった役員の選び方をしていっているというのは、PTAのあり方を大きく左右するもの。私も役員の選考方法に疑問を感じ、会長に立候補しましたが、自薦扱いになりました。選考方法を変えようとする仲間たちと一緒にいろいろ問題提起しましたが、その年は自薦扱いのままになりました。でもそのことを通じて、役員選考についての議論が様々行われ、次の年に役員選考方法や総会を2回行うことなどの会則改正を考える特別委員会がPTAの中に設置され、運営委員会メンバーと会員からの公募の委員を入れて、1年間論議されました。そして、それまで各委員会から出していた選考委員を各クラスから1名ずつ選出して、年度初めから活動することになりました。そして選考委員会自らがPTAとは何かという学習をしながら、その年の選考方法を話し合っ活動を進めるというやり方をするようになりました。

親の安心感や満足感を満たしてくれる学校がいい学校？

- 今は、懇談会に出てくる親も少なく、関心も低い。幼稚園の時の親同士の関係が、ずっと後を引いて小学校まで来る。幼稚園の時のつながりが長く続く。
- 今は、子ども可愛さより、親が自分の快か不快かというところで物を判断する親が増えているように思う。幼稚園が子どもにこう関わってほしいといろいろ企画しても、それが面倒くさいという親が多い。幼稚園に丸投げして、何もかもやってくれる幼稚園が親に人気がある。全部やってくれる幼稚園で、そういう子どもとの関わりを身につけた親は、学校へ行って、勉強や人間関係などもっと親の関わりを必要とする場面で、関わりを放棄してしまう。
- 親に人気のある幼稚園は、体育や英語の授業があるところ。今、小学校の高学年に英語の授業を入れていこうという動きがあるようですが、教師はどうするの？ 教材はどうするの？ ただでさえお金がないのに。でも幼稚園で英語の授業があるのに、小学校で英語の授業をやって何の問題があるの？という反応が多い。親の安心感や満足感を満たしてくれる学校がいい学校と、それを満たしてくれる幼稚園がいい幼稚園という、その延長できている。全国統一学力テストもいいんじゃない？という親も多い。
- それほど増えない授業時数の中で、英語の授業を新たに行えば、他の教科にしわ寄せが行きますよね。理科系の授業も増やすとっているし。新たな先生の配置をする予算もないし。そういうことについては何も考えないのでしょうか。
- そういう状況の中で、学校選択制が行われれば、親の安心感・満足感を満たす学校が選ばれていくわけですね。
- 私は以前、イギリスの日本人学校に勤めていたのですが、子どもの時からの英語教育は全く無意味だということがよくわかります。ネイティブの英語の中で生活しているので、日本語がぐちゃぐちゃになります。「寒いコーラを飲みたい」というような状態になってしまっ、そういうストレスに耐えられるか。頭の中で日本語で考えているのか、英語で考えているのか、中途半端になってしまう。論理的に考えるということをしきっと身につけるには、幼児期・小学校の時には母国語でしっかり考えるということ育てないといけない。無駄なお金で、小学校の先生たちに負担を強いて、どうでもいいような英語教育を積み重ねて、お金と時間の無駄としか言いようがない。表面的な安心感に税金を費やして、何の意味もないけれど、その実態を皆が知らない。
- そういう実態を把握したり、話し合ったり、ということをしてPTAで行えたらいいのに。
- 英語教育について勉強しようと思ったら、結構関心を示したので、「英語をしゃべることよりも、自己主張がしっかりできることと論理的に考えることが基本的には大事」ということを講師を呼んで学習したいと思っている。

私たちが納めている税金で公教育費はまかなわれている PTAからの寄付金や父母負担金は二重、三重の負担になる

- わが子の中学校で、卒対費の中から卒業時に学年の先生方にジャージを送ってました。運動会ときには、PTAから祝い金を出してました。そうした学校への寄附行為について、以前松P研として教育委員会へ話をし



にいきました。市教委の回答は、「そのような寄附は、学校で受け付けなくて、教育委員会が窓口になる」というようなものでした。その後、卒業時の親から教師への物品の贈与は受け付けないようにという市教委の方針が出されたようで、その後は学校が受け取らなくなりました。

- 私たちが納めている税金で公教育費はまかなわれているのですから、それ以外にPTAを通して寄付金を出したり、父母負担金として出したりすると、それは二重、三重の負担になる。今でも松戸市教育委員会としては、父母負担軽減費という項目を設けて父母負担の軽減に努めているはず。いくら学校が寄附を要求しても、「私たちは税金で負担しているのだから、その中できちっとやってください。学校の運営・管理に関わる費用は税金の中でやってください」と毅然と拒否すべきです。
- うち、黒板消しクリーナー4台4万円、教員の教材研究のための図書費、校長命令ではない研修のための旅費などをPTAから出しています。それ以外にも小学生新聞の購読費、図書館の購入費3万円も出しています。それからPTAの慶弔費として先生の転退職の際に各1万円出しています。
PTA会費は年間3,600円(月300円)です。それに加えて、学級費50円、児童活動費100円、教材費が750円という父母負担金。給食費なども含めて毎月5,000円が銀行引き落としされます。
- うち、給食費を含めて毎月1万円近くが引き落とされている。
- そうした父母負担金も、妥当な金額なのかどうかの検討が必要。生活保護ギリギリのところまで暮らしている人も増えているのだから、最低限の金額に抑えていくことが必要。
- 親がお金を出すのがとても大変苦しいということを経験していない先生もいるから、親が声を出していかないといけない。年度初めに、父母負担金についての手紙が来るから、これについて意見を出していく必要がある。

**税金で大学までいけたという育ち方をしている人が多い社会では、
お互い様だという気持が生まれてくる**



- 学校ごとにどれくらいの教育予算があって、どういう使われ方をしているのを、学校から聞いたことがない。
- PTAが特別会計の中から学校のいろんなものを買っている。そういうものを買わざるを得ないような教育財政状況であっても、私たちは税金として負担しているわけだから、教育委員会に先生とPTAで要請しに行きましょうともって行きたい。そういう交渉していく段階で、私たちがこれだけ負担しなくてはならないということは、学校の教育費用はどうなっているのかと聞く必要がある。
- 今までは学校規模によって予算が配分されていましたが、でも足りない場合要望すれば追加予算として出していた。でも今は追加予算は認めないというような動き。いくらと決めて配分されたら、その中でやりくりせよということ。それを学校の自律という。
- 日本の教育予算は先進国の中でも低いですね。週間金曜日の記事の中で、ちゃんと教育が大学まで保障されている社会、税金で大学までいけたという育ち方をしている人が多い社会では、お互い様だという気持が生まれてくる。でも日本のように自己負担しないとけない社会では、お互いに助け合っているんだという気持が大変低いと書かれてい

た。お金の問題だけではなくて、社会の雰囲気、人間関係まで発展していく問題で、大事なことだと思いました。

- 日本のように自己負担だと、自分の子どもに投資したお金はできるだけ回収したいと思うだろう。奨学金など公費によって大学を卒業したら、「自分は皆の税金のお陰で学校を出られたから、それを社会に還元しよう」と考えますよね。
- 今の格差の中で、持てる人たちが持てない人たちの状況について無関心で、全く想像が働かないのはどうしてなのかと思ってきたが、その文章を読んで非常によくわかりました。
- たかがお金のことだけれど、父母負担金が増えていくというのは格差をより広げていく。例えばお金のかかる部活動には、子どもが入りたくても経済的な困難を抱えていられぬ。親としてそういうことに敏感になっていかなければならないし、PTAも想像力豊かに考えていかなければいけない。
- 公費でまかなえる部活動にすればいいのに、公費で足りないからPTAが援助していくという今の状況は、本末転倒。
- そこに学校選択制も関わってくる。学校の人気取りのために部活動で実績を上げようとする。
- 部活動のユニフォームをPTAでそろえるという動きがどんどん出てくるし、全国大会などに出ることになると交通費もかかるからそれも援助する。PTAでお金を出すということがいったいどういうことなのかを考えなければいけない。
- 出せない親もいるのに。給食費だって本当に払えない状況の家庭も出てきている。
- そこを軌道修正して、どの子ども保障されるように国や自治体に求めていくという発想に変えていかないと。
- 金もない、人手もないと学校がいろいろ要求してくるけれど、PTAがダメなら、それが地域に向かっていく。それがだんだんパソコンのインク代やウサギ小屋の建て替えの援助と、どんどんエスカレートしてくる。そのことが子どもたちの豊かな教育を与えることに置き換わってしまう。

今、東大生の一番人気のある就職先が投資銀行 官僚ではない

- 親の感覚としては、最終ゴールを目指しているというところがある。大学受験をクリアーし、よい企業へ。大学をゴールとする入試制度を何とかしないと。
- 今は、大学へ入ったって、企業へ入ったって、それで安心というのは崩れていると頭ではわかっているけど、それ以外の発想が描けない。
- 現役の学生としてはどう考えますか？
- 競争が激化していて、不安定な雇用が増えているからこそ、自分だけは勝たなければいけないというところで、一部では少ないパイをめぐるって集まっていくんだらうなと思います。大学を出ても就職の決まらない人もいますし、大学院生は全く決まらないですね。就職斡旋機能としての大学はかなり揺らいでいますが、大学出て就職する以外の道を学生自身知らない。新卒しか採用しない企業も多いということを学生は知っていますし、就職留年する学生も多いですし…。



- 今の日本、このまま行けば先々国として立ち行かなくなる時代が来る。自給率も低く、環境破壊の中で太刀打ちできるような生命力も果たして持てるのだろうか。問題が山積みなのに、問題解決能力がない。若い人の中には危機感を持って、例えばフリーターの人たちの労組が勢いついて結成されている。若い人たちのエネルギーってすごい。閉塞感を感じているのだろうけれど、同時に力を合わせれば解決できるという希望も見えてきているんだろう。
- 今、東大生の一番人気のある就職先が投資銀行。官僚ではない。自分の学歴は自分の力で勝ち取ったものだということが、こうした就職先にも現れているのではないかな。もっとも考える余力のある人たちが、もっとも虚業ほいところへ流れていく。そのことに危機感を感じている。
- なかなかうまくは行かないけれど、大人が仲間を作って頑張っているというところを自分の子どもに見せることが、今できる唯一の教育なのかなと思っている。
- 子どもたちがどうしたら幸せに生きていけるか、それはつまり自分たちが幸せに生きるということだけれど、それを考えていくのがPTA。いろんな切り口でそれを追求していったら、PTAもきっと変わるでしょう。